

自由学園についての追想

竹下晃朗・自由学園の依頼で書いた原稿、2018年6月25日

自由学園男子部は、7年の学業を終えても、一切の資格や恩典を受けなくても、ぜひ羽仁先生のもとで学ばせたいという、当の本人よりも親達の熱烈な期待を受けてのスタートでした。

はじめての入学式は、まだ新しい教室の窓をはずして広くした中に、一杯の人の中で始められました。正面に据えられた大きな白木の桶太鼓の「立てよいざたて」の讚美歌のリズムに合わせた、心を揺さぶる打音で入場。入学する23人は、一人ずつTTFの記章のついたキャップと、手づくりの重いTTFと刻んだバックルと太い皮のバンドを受取り、心身共に使命感に満たされたことを覚えています。

毎朝40分の両先生交替での礼拝は、分厚い新旧約聖書と讚美歌を持つての時間は、14歳の少年にとって大変きたえられたひとときでした。

授業の時間、もと子先生は坪内逍遙訳のシェークスピアの戯曲を時間をかけてよみこみ、永遠の少年をめざす心についての話。吉一先生は橋本左内の「啓発録」や内村鑑三の「後世への最大遺物」などの熱のこもった講解は忘れられません。

私はオーストラリアで生まれ、5歳のときに日本に戻りましたが、全く日本語が話せず、1年遅れての初等部入学でした。初等部ではほんものをとゆことで、有名な画家、山本鼎や石井鶴三の直接の助言、また柳宗悦夫人の歌の時間も貴重な思い出です。

男子部1回生の秋、はじめての報告会があり、メーテルリンクの「青い鳥」第1幕のはじめの部分の英語劇の暗唱と、日時計製作の発表をしました。その時、ほんものをと、宮島眞一郎と私の2人が京都大学の山本一清天文台長のもとに派遣されて、京都市内数ヶ所の建物の外壁につけられた大型の日時計を見て歩

きました。その極めつきとして、琵琶湖畔のある私邸の庭に据えられたスイス製の10分程まで測れる、いくつかのバーニア（副尺）をもった精巧な直径30cm位の地球儀のような形の日時計を見ることができました。（出発する前夜、東京駅までY先生と数人が見送りに来てくれました。）

その後、卒業までに、古い自転車の分解、組立、塗装メッキ等、台所で出る廃油を使っての石鹸づくり、子豚を育て、それを解体してのハム・ソーセージづくり、石垣イチゴ栽培、ある父兄の寄附でつくられた本格的なづくりの小さな発電所、その電気で旋盤やバンドソーを使い、雲水机のための製材、さらに体操会、関西まで出て行った音楽発表会、本来の学業そっちのけの行事、張り出し勉強などの自由さはそれぞれの才能を伸ばしてくれました。

私はぜんそくのため入営はかなわず、卒業後、那須農場で働く卒業生が次々と軍隊にとられ、残ったため、4代目の農場主任として戦中戦後の半年働きました。

戦争によって11名の戦死者を出しました。羽仁先生は生徒を五百羅漢に例えて、期待されておられましたが、優秀な物はみな亡くなってしまったと大変嘆かれておられました。1回生の木下●●は思慮深く、クラスの中で最も頼りになる静かなリーダーでしたが、戦後の混乱の中でリーダー不在のためばらばらになって、自由学園に貢献できなかったことは残念でした。

2年前亡くなった宮嶋真一郎は、31年間、男子部教師として生徒から大きな人気と信頼を受けていましたが、前々から考えていた障害者の施設を立ち上げるため、たった一人で信州の山奥に入り、共働学舎をはじめています。今年で44年目、総勢40名の大世帯となっています。晩年失明しても学舎の一人一人を愛して、信仰に生き、祈りを欠かさず、激しい労働を共にして働きました。

私は56年前、1回生の続木満那が経営する製パン会社に入り、その後、独立して、おいしいパンとは何かを追求しています。私のパンは独自のノウハウなので、天下一品です。那須農場で小麦を育て、それを製粉して、毎日のように焼いて食べたバフン（のような）パン。それが本校でよみがえったらいいなと思っています。